

[学術論文]

## 子ども期における外国語通訳経験の長期的影響<sup>1</sup>

ー日本で育った外国人に対するインタビュー調査と考察ー

### Two Case Studies of the Long-Term Impact of Foreign Language Interpreting Experiences in Childhood -Interviews with Foreigners Raised in Japan-

ロハス エスピノーサ ロレーナ ス  
Lorena Sue ROJAS ESPINOZA

はじめに

#### 1. 先行研究

- 1.1 ヤングケアラー研究
- 1.2 ヤングケアラーであることから来る影響：肯定的・否定的な側面
- 1.3 先行研究の問題点と本研究の研究目的

#### 2. 調査方法

- 2.1 調査対象者
- 2.2 調査対象者 1:(仮名)クラウディアさん
- 2.3 調査対象者 2:(仮名)マルシアさん

#### 3. 通訳場面

- 3.1 クラウディアさんの通訳場面
- 3.2 マルシアさんの通訳場面

#### 4. 外国語を通訳する子どもの長期的影響ー2つの事例から

- 4.1 クラウディアさんの場合
- 4.2 マルシアさんの場合

#### 5. 考察

おわりに

**要旨** 近年、日本に在住する外国人が増加するなか、居住地域における外国人支援が大きな課題となっている。そして、多言語支援の必要性は年々増しているが、特に家族のために外国語通訳を担う外国人の子どもに関心が向けられている。以下ではそのような役

---

<sup>1</sup> 本論文の一部は、2022年度異文化コミュニケーション学会第37回年次大会(online)(SIETAR JAPAN)において発表したものである。

割を担う子どもをヤングケアラーと呼ぶ。現在、日本における外国人の子どもが、具体的にどのような場面でどのように通訳しているのかについては十分に明らかになっていない。そこで本研究は、日本語と外国語に通じた2名の日本在住外国人女性を対象に、子どもの時に外国語通訳を担っていた経験について調査した。調査は、インタビューを通じて、成人した彼女らが成長過程において直面した具体的な通訳場面に焦点を当て、長期的影響を考察した。その結果、対象者2名の生活環境と通訳場面を比較したところ、著しい差異が見られた。さらに、多言語支援の有無が彼女らに与える影響は非常に大きいことも明らかになった。子どもが家族のために通訳をする背景は多様であり、組織的な対応が求められる。特に、ヤングケアラーの保護者が薬物依存などに代表される何らかの依存症や精神疾患を患っている場合、子どもが重大な負担を負う可能性を示した。

全ての子どもが健全に成長し、子どもらしく生活できるように、外国語を通訳するヤングケアラーの社会的認知度の向上、そして福祉、行政、医療、教育、司法などの多言語支援体制を再構築していくことが求められる。

**キーワード：**外国語通訳、ヤングケアラー、通訳場面、外国人の子ども、長期的影響、多言語支援

## はじめに

現在の日本社会において、多様な言語文化を背景とする人々との共生が大きな課題となっている。日本は、1980年代のバブル景気による人手不足を補うため、日系ブラジル人及び日系ペルー人を始めとしてベトナム、ネパールなどから多くの外国人労働者を受け入れてきた。その後も在留外国人の数は急増し、出入国在留管理庁の統計によると、2023年6月末時点では322万3,858人となっている。永吉(2020)は、このまま在住外国人の増加が続いた場合、日本において多様な背景をもつ外国人人口の割合は2065年までに12.0%になるだろうと述べており(p. 218)、このことから日本に在住する外国人の子どもの数も同様に増加すると推定される。加えて、このような多様な背景を持った子どもは、種々の困難な状況に置かれることがあり、中でもケアを担う子どもや若者(以下、ヤングケアラーとする)のケースが注目されつつある。こども家庭庁によると、ヤングケアラーとは、「本来大人が担うと想定されている家事や家族の世話などを日常的に行っているこどものこと」を指す。かつては、外国語の通訳をする子どもたちはヤングケアラーとしての位置づけはされてこなかったが、現在では家庭庁のホームページにおいてもヤングケアラーの定義が拡大され、「日本語が第一言語でない家族や障がいのある家族のために通訳をしている」子どもも、その一つとして含まれている。

一方で、これまでヤングケアラーをテーマにした論文や文献においても、外国語を通訳する子どもについての詳細な考察はなく、その後の人生を含めた実態は明らかになっていない。そのため、本稿では、インタビューにより、成人となったヤングケアラーの実態を把握することを目的とし、

家庭内のケアにおける実際の通訳場面の詳細を考察し、ケアラーとなった子どもたちのその後の人生における影響について論じる。「外国語を通訳する子ども」の調査研究をすることによって、ケアを担う外国人の子どもや若者とその家族の実態について把握し、効果的な支援や政策につなげていくことは、多様化する日本社会において必要不可欠であると考えられる。

## 1. 先行研究

### 1.1 ヤングケアラー研究

イギリスでは、1980年代から社会福祉分野においてヤングケアラーに関する研究と調査が行われている。この研究領域の先駆者である Becker et al. (2000)は、ヤングケアラーを“children and young persons under 18 who provide or intend to provide care, assistance or support to another family member”(p. 2)と定義している。また、Dearden and Becker (2004)は、ケア内容は6つに分かれていると述べている(p. 7)。

1. Domestic tasks refer to household chores such as cooking, cleaning, washing, ironing etc.
2. General care refers to nursing-type tasks such as giving medication, changing dressings, assisting with mobility etc.
3. Emotional support refers to observing care recipients' emotional state, providing supervision or trying to cheer them up when they are depressed etc.
4. Intimate care is washing, dressing and assisting with toilet requirements.
5. Child care refers to helping to care for younger siblings in addition to other caring tasks.
6. The category other refers to tasks such as household and other administration, bill paying, translating for non-English speaking relatives, accompanying to hospital etc.

Dearden and Becker (2004)は、6つのケア内容の最後に“translating for non-English speaking relatives”を挙げているが、その具体的なケア内容については説明していない。一方、近年の研究では、イギリスにおける移民家庭の子どもや若者による言語通訳について具体的に言及されるようになった。例えば、Cline et al. (2011)は、ヤングケアラーが担う外国語通訳を“Language brokering by children and young people from immigrant families typically involves translating or interpreting on behalf of adult family members or siblings, e.g. in conversations with officials or professionals who do not speak the family's home language”(p. 207)と定義している。

近年では日本においても、ヤングケアラー研究が広がりを見せている。例えば、医師の診察を受ける際、日本語がうまく話せない親のために通訳をした外国人の子どもたちの経験をまとめた冊子『通訳を担う子どもたち』を、医療通訳研究会（神戸市）が2013年に出版した。医療通訳は精神的な負担が大きく、また専門用語が多いため、十分な知識がなければ誤訳のリスクがある。しかし、当研究会によると、子どもが医療通訳を担う際、医療通訳には十分な報酬が提供されていない

現状や、市民団体のボランティアがその役割を担っているという状況があると報告されている(pp. 28-35)。

一般的には、未成年者の子どもは、家族や保護者から守られ世話をしてもらう存在と考えられる。しかし、親や家族の一員が病気や障がいを持っていたり、日本語を話すことができない家族がいたりする場合、未成年の子どもであっても、成人が担うようなケアの責任を引き受けることがある。こうしたヤングケアラーが負うケアの内容は、家事や家族の世話、介護、外国語通訳、家族に対する感情面のサポートなどがあげられるが、子どもは年齢や成長の度合いにそぐわない状態でこれらを担っている。

三菱UFJリサーチ&コンサルティング(2021)は、子どもがサポートする側に立っている以上、子どもの学力不振だけでなく、精神や身体にも悪影響を及ぼすとし(p. 156)、近年になって教育現場の協力を得てヤングケアラーの現状を明らかにする研究は増えたと主張している(p. 1)。こうした教育現場での調査研究は、社会におけるヤングケアラーへの認識や、その実態を明らかにし、ケアを担う子どもたちや若者への効果的な支援や政策につなげて行くことを目的としているものである。

加えて、株式会社日本総合研究所(2022)は、アンケート調査とインタビュー調査の概要とともに、調査から見えた現状と課題をまとめている。これによると、ヤングケアラーと思われる小学生の子どもが行うケアについて、「家族の代わりに、幼いきょうだいの世話をしている」が最も高く79.8%であり、次に、「家族の通訳をしている(日本語や手話など)」が22.5%となっていることが明確になった(p. 19)。つまり、日本語が苦手な親などに代わって通訳をしている小学生が一定数いることが確認されたことになる。また、外国語を通訳するヤングケアラーの把握や支援にあたって工夫していることについて、教員が「通訳を手配し、対応している。ただし、市の通訳の予算に限りがあるため、教員が翻訳アプリ等で対応をすることもある。」(p. 22)と回答しているものもあった。しかし、この調査では外国語を通訳するヤングケアラーに関するこれ以上の詳細な報告がなく、子どもが日常的にどのような言語サポートを行っているのかは明らかにされていない。

一方、白梅学園大学ヤングケアラー調査研究プロジェクト(2020)は、東京都小平市において教員の「ヤングケアラー」という言葉の認知度について聞き取り調査を行った(p. 29)。その結果、教員に「ヤングケアラー」という言葉を知っているかを尋ねたところ、全員が知らないと回答し、10年近い経験がある教員であっても、「職場で聞いたことがない」と答えていた。その後、回答者に「ヤングケアラー」の定義を提示すると、「そういう子どもならいる」と半分近くが答えたと言及している(p. 29)。つまり、「ヤングケアラー」という言葉そのものが、学校現場の中には未だ浸透していない状況が明らかになった。一方、この言葉の概念を理解することにより、本来ケアされるべき存在である子どもがケアを担っている状況を把握し、このような環境下にある子どもへの見方が変化していくと指摘している(p. 29)。

## 1.2 ヤングケアラーであることから来る影響：肯定的・否定的な側面

先行研究からは、ヤングケアラーであることによる否定的な影響から肯定的な影響まで、幅広く報告されている。

まず、否定的な側面としては、子ども自身のキャリアを築くための社会的機会である教育機会や雇用機会の損失があげられる。実際に、家庭内で家族のケアを担うことで、進学や就職をあきらめざるを得なくなるヤングケアラーも存在する。その理由は、子どもが家族のケアに全神経を集中させるからである (Aldridge & Becker, 1993, p. 460)。例えば、子どもがケアをするために学校での遅刻や欠席が続き、学業についていけないことがある。さらに、薬物やアルコールの問題を抱えた親族を介護している子どもたちが、教育的困難を経験しているとも報告されている (Dearden & Becker, 2004, p. 11)。精神面では、親がうつ病になると、子どもは親のケアに従事し、一時的に肯定的な評価や自己効力感を得る。しかし、親の病状悪化や家庭崩壊の危機により、子どもはますますケアに関わる。ただ、子どもは彼ら自身に対するサポート不足で孤独感を深め、精神疾患を発症する可能性があるとも報告されている (佐藤, 2019, p. 607)。

これらのような否定的な側面とは逆に、先行研究からはヤングケアラーであることの肯定的な影響も取り上げられている。主なものとしては、当人とケアの受益者である家族との間での情緒的な結びつきの強化、自己認識の向上、そしてケアに対する充実感などといった内容が当事者からは報告されてきている (Bolas et al., 2007, pp. 839-840)。

ここまで、ヤングケアラーの経験が当事者に及ぼす影響について、肯定的・否定的な両面からみてきた。このうち、当事者の心理的な面に関しては、自己に対する誇りや、ケアをすることに対するやりがいなどが、肯定的な影響として報告されている。一方、否定的な側面としては、精神疾患のリスクが指摘されているものの、ヤングケアラーであることが持続的な精神的な影響を当事者に与えるかどうかについては、十分な検討が行われていないのが現状である。

## 1.3 先行研究の問題点と本研究の目的

近年、日本では外国人の子どもを対象とした日本語教育を含む言語支援に関する取り組みが増加している。特に2006年以降、定住外国人政策においてさまざまなサービスや支援が提供されるようになった (佐竹ら, 2015, p. 63)。例えば、保育園から公立高校までの教育機関では通訳者や相談員の配置が行われ、行政機関では特に外国人が多く在住する地域の役所や保健所でも同様の取り組みが見られるようになってきている。しかし、医療、司法、行政などの分野によっては未だに支援が不十分なままであり、外国語通訳の場合においても本来ならケアを受けるべき子どもたちが、実際にはケアを提供する立場に置かれている状況が見うけられる。

株式会社日本総合研究所 (2022) の調査では、外国語を通訳する子どもについても述べられているが、ヤングケアラーの通訳場面について詳細に調査されていないため、その支援を具体化することが非常に難しい状況である。さらに、同調査における教員への聞き取り調査から判明したのは、ヤングケアラーという概念自体について理解が不足しているという現状である。また、外国語を通

訳するヤングケアラーが、その後どのような人生をたどったのかについては未だに明確に把握されていない。

以上のことから、本稿では、インタビューにより、外国語を通訳するヤングケラーの実態を把握することを目的とする。成人となった外国語を通訳するヤングケアラーの実際の通訳場面とケアの詳細を考察し、その後の彼女らの人生におけるヤングケアラーとしての役割が与えた影響について論じる。また「外国語を通訳する子ども」の調査研究をすることで、外国語通訳を担っている子どもや若者とその家族の実態について把握し、効果的な支援や政策につなげていくことを目的とするものである。

## 2. 調査方法

### 2.1 調査対象者

本稿では、日本語と外国語に通じる女性2名の外国人を対象に、インタビュー調査を行った。なお、インタビューは書面で研究目的を伝えた上で、回答は自由であること、回答による不利益が無いことを伝え、本人の書面承諾を得て実施した。対象者の氏名に関しては、プライバシー保護を図るため仮名を使用し、国籍情報や居住地域を示さない形で記載している。また本論における談話トランスクリプト記述においては、原文ママであり、著者による補足情報は、角括弧 [ ] 内に記する。なお、記載情報は2022年8月時点でのものである。

### 2.2 調査対象者 1:(仮名)クラウドディアさん

クラウドディアさんの両親は、90年代に来日した。両親は婚姻関係にあり、クラウドディアさん以外に姉と弟がいる。幼少期にはまず両親だけが来日し、その数年後、クラウドディアさんは姉と弟と日本に来ることとなったが、当時クラウドディアさんは8歳、姉は14歳、弟は5歳だった。日本に到着後、間もなく日本の公立学校に転入した。表1は、調査当時の情報である。

表1 調査対象者1の情報

仮名	クラウドディアさん
年齢・性別	33歳・女性
最終学歴	日本の短期大学卒業
家族構成—幼少期	母、父、6つ年上の姉と3歳年下の弟
家族構成—2022年時点	母と同居 (本人は結婚歴および出産歴なし)
移動歴	8歳に日本へ移動
※帰国歴	※帰国歴なし

## 2.3 調査対象者 2:(仮名)マルシアさん

マルシアさんは、90年代に両親とともに来日した。両親は婚姻関係にあり、マルシアさん以外に妹と弟が4人いる。幼少期から両親の仲は悪く、父親は無職でギャンブル依存症だった。一方、母親はアルコール依存症で、うつ病を患っていた。表2は調査当時の情報である。

表2 調査対象者2の情報

仮名	マルシアさん
年齢・性別	32歳・女性
最終学歴	中学1年生以降不登校（中学は義務教育なので、中退はあり得ないため）
家族構成—幼少期	母、父、兄弟・姉妹4人
家族構成—2022年時点	パートナーと同居、子ども1人
移動歴 ※帰国歴	6歳のときに日本へ移動 ※成人になってから一度帰国

## 3. 通訳場面

### 3.1 クラウディアさんの通訳場面：「自分〔親〕がちゃんと伝えたいものとか、そういうものが全然伝わっていかない。」

クラウディアさんは、日本語を習得し始めたころから家族のために通訳をすることとなった。家族の通訳サポートは、①家族間通訳、②ビジネス通訳、③学校間通訳の3つに分類可能である。クラウディアさんは、次のように通訳場面を詳細に述べた。

私と弟は小さく来てるから、どんどん日本語が発達するんだけど、〔母語〕忘れてっちゃうから、家族間での会話が一時期成り立たなかったときがあって、お父さんと弟が会話にならないとき、誰かが真ん中に入って、間に入って通訳しないといけない。親としては、自分の子たちはこっち〔日本〕で安全に教育があって育っていくんだけど、自分〔親〕がちゃんと伝えたいものとか、そういうものが全然伝わっていかない。それでも苦労したんじゃないかなと思う。

その他、両親に対する通訳サポートについては次のように語った。

父親が自営業を始めるようになったんだけど、材料とかを買う時とか、お客さんとのやり取りでうまくコミュニケーションとれなかったときに、お手伝いとか通訳はしてたのが印象に残ってたのかな。

さらに、姉に対する言語サポートについても以下のように言及した。

姉の子どもを病院に連れていくときに、通訳をしたりとか。あと、姉の子どもが学校に行くときに宿題とか先生からの案内とか、そういう部分で彼女のお手伝いはしたことはあるね。

一方、家庭内のサポートにおいて、両親が夜遅くまで仕事をしていたため、クラウディアさんの姉が母親代わりになったとし、自身も弟の世話をすることになったと述べた。

私たちの面倒を見てたのが、長女で、私は弟の学校の宿題だったりとか「友達関係が荒れてるなあ」と思ったら、ちょっと話をしたりとか、そういう部分ではサポートしてたかな。

### 3.2 マルシアさんの通訳場面：「子どもながらこんなことは知りたくなかったっていうのはいっぱいある。でも、私しかいなかったから。」

マルシアさんは小学校に入学してから、休むことが頻繁になった。彼女は、学校側の対応について語りながら、母親の行動を客観的に述べた。

私は、[当時感じていたことを]出せなかった表情に、それが一番[印象に残っている]。先生も気づかないと思うんだわ。悲しいとかも全然出さなかった。学校とか入ったら楽しい。ただ経済的な面は気づいていたと思う。自分だけ鉛筆がないとか、筆箱がないとか、ランドセルがないとか、あと学校でいろんな行事があると、お金を集めるんだけど、自分のだけ集められないとか、それはきっと気づいていたと思う。[でも]先生は家へ行かなくなった。先生は、何が起きているのか知りたかったけど、誰も先生に教えない。[訪問する先生を]家族が無視する。[今]大人として振り返るとお母さん、自分を守っていたんじゃない。自分が本当休ませてることの罪悪感があるから、悪いと思ってるので、他の大人に言われたくない。自分を守るためじゃない。

マルシアさんは、クラウディアさんと同様、日本語を習得し始めてから、通訳サポートをするようになった。マルシアさんの通訳サポートは、①病院通訳、②行政通訳、③警察通訳の3つに分類可能である。マルシアさんは保護者への通訳サポートについて、病院と役所でのやりとりを例として詳細に語った。



私が日本語を覚えると「私任せ」。ずっと、7歳の時から、全部私が通訳していた。病院や市役所、全部。どっちかと言うとお母さんの通訳。[病院での通訳において分からない単語や表現があったとき]「分からない」って言っていた。だから、本当に普通に検査の結果も分からないで、薬もらっていたりとか、良く分からなかった。どっちかと言うと、一番大事なのは、お母さんは病院に行って、「ここ診たい」「ここが痛い」「あれがしたい」だけって言う。ほかは別に大事じゃなかった。

さらに、生活保護の申請においても、マルシアさんが手続きを行ったと語った。

生活保護[の手続き]、私がやった。多分、12歳ぐらい。その時は、[職員が]家にきて、「どんな生活をしているのか」、「何でそんな生活保護とか」って言って。一番覚えてるのが、来た人[職員]が「子ども邪魔なの？」と言われたこと。私に、私がお母さんに[通訳した]。でも、[職員に]言われたとき、兄弟だから「えっ、違う」って思わず、自分の感情で答えた、12歳の時。すごい辛かった、その時。「子ども邪魔なの？」みたいな。「いや、そんなことない」「食べ物がないから生活保護とか、お父さん仕事しないからそれしかない」。本当、嫌な思いしかない。

マルシアさんは、当時の思い出を語っている時に手が震え始めた。またマルシアさんは、子どもでありながら大人の事情を通訳する立場に立っていたと述べたが、彼女はそのような内容を訳すことについて次のように語った。

[話している内容は]自分に対してじゃないんだけど、自分が言ってる[通訳してる]から、[言われたことは]自分のように受け取る。自分がその輪に入っているから、色々あるよ。例えば、[職員に言われたことは]「仕事すれば、それ済むことじゃない」、「仕事すれば良いでしょ」みたいな。色んな変なことを言われた。だからすごい悪い大人がいっぱいいたよ。子どもに対して、本当、「何でそんなことするのかな？」って今になってすごい思う。

さらに、マルシアさんは職員とのやり取りだけでなく、警察官と母親の通訳経験もあると語った。

お父さんとお母さん夫婦ケンカで、それすごい辛いのが警察来るでしょ。お父さん有利じゃん。[日本語]しゃべれるから。お母さんは[日本語]しゃべれない。お母さんが私に言うの「こう言いなさい」って、私が警察にそう言うと、お父さんがこっち[自分]に怒鳴る。[父親]「何でそんなこと言うの」「だまっとけ」みたいな。子どもながら

こんなことは知りたくなかったって言うのはいっぱいある。内容とかね。でも、私しかいなかったから...小学校、市役所、警察、みんな自分たちに対して背を向いていた。夫婦ケンカだから。家族で解決しろ。だから、誰も助けてくれない。

## 4. 外国語を通訳する子どもにおける長期的影響—2つの事例から

### 4.1 クラウディアさんの場合

クラウディアさんは、子どものときから通訳をすることが家族の絆を強める要素になり、自身の日本語の成長を促すきっかけになったと述べた。

父へのサポートによって、ビジネスや家族のコミュニケーションに良い影響をもたらしたと思う。言葉が通じないことで商品の間違った購入やトラブルを防げたし、弟とのコミュニケーションの困難な時期にも助けになった。[クラウディアさん本人] 姉としても通訳の苦勞を減らし、家族の絆を強める要素になったと思う。当時のサポートは恥ずかしい思いもしたが、日本語の成長を促すきっかけになった。通訳をすることで褒められることや伝わる喜びを感じ、モチベーションにつながった。父を手伝うことは当たり前感覚だったが、伝わる達成感が大きかった。

また、クラウディアさんは、自身が子どもでありながら通訳をすることを次のように捉えていた。

[子どもでありながら通訳することは] ポジティブ。子どもらしくできなかったことは多かったけど、自分が育つ環境は選べられないから、今の職業もそうだけど、そこにつながったからいいことだと思う。大人になるまでの経過のなかで、「通訳になりたくない」という考えは何回かあった。そういう仕事をしているのも希望してやったんだよね。親もみだし、周りの人で困っている人とかもみて、手伝うことで彼らが少しでも楽になる姿を見ていくと「気持ちが良くなる」良い気持ちにつながるから。良い行程だったのかな。

最後にクラウディアさんは、外国語を通訳する子どもも「ヤングケアラー」であると認識されたことについて次のように語った。

色々、[私は] 強要されなかったけど、親が必要とするサポートは、私たちが多少やれたと思う。やれない環境の子とかなかにはいるから、外国語を通訳する子どもが[ヤングケアラーとして] 認められるのは大分変わって来るんじゃないかな。苦しむ子が大人になっていくんじゃないかな。

## 4.2 マルシアさんの場合

マルシアさんは、外国語を通訳する子どもだったことは、自身にとって否定的なできごとだと語り、日本語と母語に自信がなく、人と話すことが怖い時期もあったと述べた。彼女は、日本語と母語の能力はどちらも上達しなかった理由は、それまで学業に励むことができなかったからであると述べた。

色んなことに自信がない。人としゃべるのが怖かった時期もいっぱいあった。これは[日本語・母語]言語関係なく。自分のなかでは、日本語と母語が半分半分。日本語がうまいわけじゃないし、母語がうまいわけじゃない。中途半端。どっちもちゃんと勉強してないから。

さらに、マルシアさんは現在においても、行政の手続きや問い合わせなどをするときには、プレッシャーを感じ、苦痛だと語った。

何か問い合わせとか、難しい問い合わせをしないといけないときは、すごいプレッシャー。でも、私は嫌なの。問い合わせたくない。だから、無視じゃないけど、スルーしたい。ちょっとだけ待とう、みたいな...手続き全般がいや。

また、マルシアさんは、就職活動で内定が出ない時はとても辛かったと述べた。

今は少し治った。前は酷かった。前は仕事を探すときの電話も手が震えてた。電話できなかった。「仕事ありますか」って言えなかった。私の頭では[相手に]お願いをしている、断られたらどうしよう。頭のなかずっとそんな感じ。自分は、[子どものときから親の代わりに]ずっと「お金がない」「食べ物下さい」「電気がないから何とかしてください」みたいな感じだったから、仕事を探すときは私が[相手]にお願いしてる、そこで「仕事ないよ」って言われたら、それだけでもショック。否定されてる感じ。だから、震えてた、手。

最後に、マルシアさんに「ヤングケアラー」について知っているか尋ねた。

テレビで観たよ、ヤングケアラー。「あー、あたしだー」と思って。学校から帰ってくるとご飯作ったり、家の掃除したり、色々ある。

そして、マルシアさんに、現在日本語を第一言語としない家族を通訳する子どもも「ヤングケアラー」として位置づけされたことを伝えると次のように話した。

よかった。「こういうのがあるよ。みんな一人じゃないよ」って、そこが一番大事だと思う。「[ヤングケアラーは] いけないことだ」って教えるのが良い。自分が強くなって、「もう嫌だ」って言える立場になれると思う。親に対しても。

## 5. 考察

対象者2名のインタビューを通して、通訳場面とケア全般をまとめると以下ようになる。(以下の表に記載されている「×」と「○」の意味は、通訳経験の有無を表す。○→通訳経験あり、×→通訳経験なし)

表3 調査対象者2名の通訳場面

通訳場面	クラウディアさんの場合 通訳の有無	マルシアさんの場合 通訳の有無
学校	× (母親が日本語で対応できないときは通訳支援者がいた)	○ (母親と教員の通訳)
警察	×	○ (母親と警察官の通訳)
市役所	× (母親が日本語で対応できないときは通訳支援者がいた)	○ (母親と職員の通訳)
病院	○ (姉家族と医療従事者の通訳)	○ (母親と医療従事者の通訳)
家庭内 (親・兄弟・姉妹)	○ (父親と弟の通訳)	×
家庭経営 の商売	○ (父親と取引先の通訳)	×
その他の ケア	弟の世話や宿題の手伝い、弟の感情面サポート	弟と妹の世話、家事、手続き全般

上記の分析により、クラウディアさんとマルシアさんの通訳の必要性和彼女らが行ったケアの特性が明確になった。これらを比較すると、彼女らの家庭状況や通訳の必要性が異なり、特に行政間の通訳や家庭内ケアの負担は大きく異なることが明らかになった。また、両者は外国語を通訳す

る子どもとして過ごしたが、成人となってからは過去の経験やケアの負担の捉え方が異なっている。

クラウディアさんは、家庭内においてコミュニケーションの懸け橋として貢献し、この経験から彼女は家族との絆や責任感を強く感じている。それだけでなく、クラウディアさんは幼少期から通訳をすることは、言語能力を高める要素になったと述べた。さらに、長期的影響においては、クラウディアさんは、その通訳経験が現在の職業につながったと語った。

一方、マルシアさんの場合、行政や法的場面の通訳に加えて、家庭内のケアを行い、より複雑な負担を背負っていた。これにより、彼女はクラウディアさんとは異なる種類のストレスと責任を負い、そのことは彼女のその後の人生に大きく影響を与えた。マルシアさんは、幼少期から通訳をすることが否定的な経験であったと述べた。彼女によると、この経験は行政手続きに対する不安や不信心、就職活動の困難さなどにつながっていると語った。さらに、マルシアさんは学業に励む機会が狭まっていたため、自身の日本語と母語の言語能力に不安を感じていると述べた。このように両者は、外国語を通訳する子どもとしての経験をしているが、通訳場面やその内容の複雑さによる経験がその後の人生に大きな違いをもたらした。

しかし、通訳経験を通じて両者の立場が一致した共通点は2つある。1つ目は、通訳をすることによって、同年代の子どもと同じようなことができなかつた点である。例えば、勉強、習い事、遊びなどが挙げられる。2つ目は、外国語を通訳する子どもも「ヤングケアラー」であることが認知されたことを肯定的に捉えている点である。彼女らは、子どもが通訳を強要されないように、また、通訳ができない子どもたちのために、彼ら/彼女らとその家族に適切な言語支援やサポートが提供されるべきであると述べた。

また、長期的な影響では、複雑な通訳内容や家族崩壊の危機などにより、通訳経験が否定的に評価されることが明確になった。その結果、ヤングケアラーだったことが、人生観や価値観、さらには将来の選択や人間関係にも影響を及ぼす可能性があることが明らかになった。

外国語通訳を担う子どもたちは、日本人のヤングケアラーと同様、またはそれ以上の負担を背負っていることが明確になった。2人の事例から分かるように、彼女らは単に外国語の通訳を担っていただけではなく、家族全体のケア、例えば、保護者が長時間労働で不在になることから、兄弟・姉妹の世話、食事の支度、勉強の手伝いや友人関係の相談などをあらゆる面でケアしていたことが明らかになった。また、マルシアさんの場合は、市役所職員とのやり取りで通訳だけでなく、手続き全般を担っていたことも明確になった。その結果、ヤングケアラーとなった外国人の子どもは、単に言語の通訳だけでなく複数のケアを担っていることを示している。

## おわりに

本調査を通して、日本においては異なる言語背景を持つ子どもが直面する課題とニーズが浮き上がった。特に、医療、司法、行政において必要な時期と場所で稼働できる通訳者が現場のニーズと一致していないことが明らかになった。また、本研究の対象者であるマルシアさんは、多岐にわ

たる通訳経験を否定的なものとして捉えており、その経験が今でも人生に悪影響を与えていると感じている。特に、ヤングケアラーの保護者が薬物などに代表される何らかの依存症や精神疾患を患っている場合、子どもに重大な負担が生じると考えられる。これを踏まえると、子どもが自分の生活や健康を犠牲にするほどの負担を担うことは防ぐべきであると考えられる。

世界のどこにおいても子どもが健全に成長し、子どもらしく生活できるためには、外国語通訳をするヤングケアラーの社会的認知度の向上、そして福祉、行政、医療、教育、司法などの多言語支援体制を再構築していくことが求められる。

今回は2人の事例のみであったが、今後はより多くの通訳経験者の体験について調査し、外国語通訳を担う子どもの肯定的と否定的な側面の両方の体験における個別的要因や共通する要因について、さらに考察を深めたい。

## 参考文献

- Aldridge, J., & Becker, S. (1993). *Children who Care: inside the World of Young Carers*. Leicestershire: Department of Social Science Loughborough University.
- Becker, S., Dearden, C. and Aldridge, J. (2000). "Young carers in the UK: research, policy and practice." In *Research, Policy and Planning*, 8(2): 13-22.
- Bolas, H., Van Wersch, A., & Flynn, D. (2007). "The well-being of young people who care for a dependent relative: An interpretative phenomenological analysis." In *Psychology and Health*, 22 (7), 829-850.
- Cline, T., Crafter, S., O'Dell, L., & de Abreu, G. (2011). "Young people's representations of language brokering." In *Journal of Multilingual and Multicultural Development*, 32 (3), 207-220.
- Dearden, C. & Becker, S. (2004). "Young Careers in the UK: The 2004 Report" London: Careers UK.  
<[https://repository.lboro.ac.uk/articles/online\\_resource/Young\\_carers\\_in\\_the\\_UK\\_the\\_2004\\_report\\_/9470903](https://repository.lboro.ac.uk/articles/online_resource/Young_carers_in_the_UK_the_2004_report_/9470903)>.  
2024年3月29日閲覧.
- 医療通訳研究会(2013).『通訳を担うこどもたち～医療とコミュニケーション』神戸市看護大学第14回国際フォーラム.
- 株式会社日本総合研究所(2022).『令和3年度子ども・子育て支援推進調査研究事業：ヤングケアラーの実態に関する調査研究－報告書』.
- こども家庭庁.『こどもがこどもでいられる街に』.<<https://www.mhlw.go.jp/young-carer/>>. 2024年3月06日閲覧.
- 佐竹、金、近藤、賽漢、李、津田、馬(2015).『多文化家族への支援に向けて—概要と調査報告—』名古屋学院大学論集. 社会科学篇,.51 (4): 49-84.
- 佐藤みのり(2019).『うつ病の親を持つ子どもがヤングケアラー化し精神疾患を発症する場合』日本教育心理学会第61回総会発表論文集 607.
- 白梅学園大学ヤングケアラー調査研究プロジェクト (代表: 森山千賀子) (2020).『ケアを担う子ども (ヤングケアラー) についての小平市調査—公立小中学校の教員等を対象にした調査研究報告書—』.

子ども期における外国語通訳経験の長期的影響（ロハス エスピノーサ ロレーナス）

出入国管理庁.『令和5年6月末現在における在留外国人数について』.

永吉希久子(2020).『移民と日本社会—データで読み解く実態と将来像』中央公論新社.

三菱UFJリサーチ&コンサルティング(2021).『ヤングケアラーの実態に関する調査研究報告書』.